

『開元占経』の基礎的研究—日本・中国・台湾所蔵資料の悉皆調査を中心に—

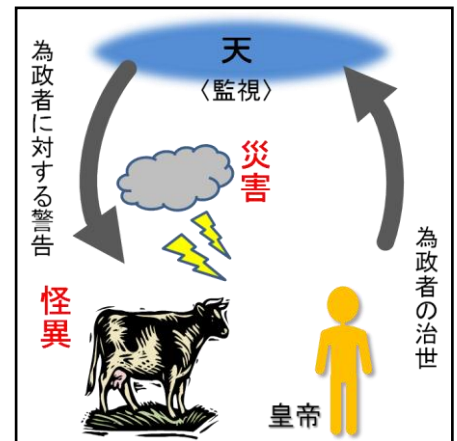
佐々木聡 (東北大学)

要 旨

『開元占経』とは、中国の唐王朝の時代に玄宗(685-762)の勅命を受けて編纂された、120 巻に及ぶ天文暦学・占術学の集大成である。本書は、東アジアの科学史・社会史・宗教史など、広い分野に裨益する資料であり、近年では竹簡などの考古的新資料の研究でも注目されている。その一方で、本書は、テキストの乱れや伝来の過程の謎など、問題の多い資料として知られるが、日本・中国・台湾の諸機関に 30 種類近く伝存する本書の写本群はこれまで大部分が調査されたことがなかった。つまるところ『開元占経』の研究は、恰も全ての写本が殆ど同じであるという想定のもとで行われてきた。しかし実は、かつて内容の大きく異なる写本(異本)が発見されたこともあり、上述の想定には疑問もあった。そこで、報告者は各国に散在する『開元占経』写本の網羅的調査を開始した。そこから徐々に、従来不明であった『開元占経』の伝来過程や複雑な写本の系統、さらには謎に包まれていた異本の出自なども明らかとなってきた。

『開元占経』の概要—「天人相感」と「観象授時」—

『開元占経』は天変地異や災害、怪異現象などから国家の未来を読み解く「占い」を集成したものである。主な内容は、天空で起こる異変(所謂「天変地異」の天変)であり、これは全体の九割近くを占める。例えば、日月蝕や彗星などの天文現象から、雲や虹、早や大雨などの異常気象まで、豊富なバリエーションを持つ。また、地上で起こる異変や災害、怪異現象(「天変地異」の地異)などの内容もある。これは全体の一割程度に相当し、地震や地殻変動から、建造物の異変、器物・植物の怪異や動物の異常行動なども含まれる。以上は、漢代以降に国家理念となる「天人相感思想」、つまり君主の治世が乱れると、天が警告のために天変地異や怪異を起こす、という観念(右図)に基づく。この天人相感思想が、後世、広く社会に浸透し、一種の通念となってゆくのである。



この天人相感思想が、後世、広く社会に浸透し、一種の通念となってゆくのである。

その一方で、数巻分ではあるが、天体の高度や惑星の配置、公転周期とそれに基づく暦の計算方法なども説かれる。これは「観象授時(天文の運行を観測し、民に暦を授ける)」を為政者の重要な責務とする儒教規範に基づく。つまり、『開元占経』は国家理念としての占いと暦を網羅した、為政者のための書物であった。

『開元占経』をめぐる諸問題—テキストと伝来過程—

『開元占経』は、唐の次の宋王朝では、目録に三、四巻のみの端本として記録された後、国家の記録から姿を消すため、宋代以降、散佚したと考えられていた。それが後世、明末 18 世紀に至って、程明善という人物が古い仏像の中から『開元占経』の古写本を発見して話題となり、再び流布するようになった、とされる。現在、最もよく用いられる四庫全書本は、この程明善本の流れを汲む。しかし、この本は巻数が唐代の記録より多く、民間で発見されたために、加筆され改変された本と評価された。もとより、印刷物ではなく写本として伝わったものであるから、それがどこまで唐代の原形を留めているかは疑わしい点もあった。こうした評価に、当時の占いを迷信視する風潮も加わり、清代では、本書はあまり重要な書物とは見なされなかった。こうして、本書は字句や内容が乱れたまま伝わることとなった。その一方で、かなりの数の写本が未調査のまま放置されていたが、これらも全て程明善本の流れを汲むものと見なされ、調査の必要性が認識されることはなかった。そのため、1960 年代に、安居香山氏が内容の異なる写本(7 巻分の残巻)を発見した際にも、他の研究

者からは殆ど反響がなかったのである。

新資料「成化閣本」の発見

こうした状況を変える契機となったのが、報告者による「成化閣本」の発見である。実は、明末の程明善の発見より遡ること百数十年前の成化年間(1465-87)に、明朝の蔵書閣に『開元占経』の秘蔵本(成化閣本)があったことが後世の随筆に書かれており、一部の研究者には知られていた。しかし、この秘蔵本の存在は、実物が未発見であったことから、殆ど注目されなかった。

ところが、報告者の予備的調査の過程で、その実物の写しと思われる写本(復旦大学所蔵本、左図)が見つかった。しかも、その写本の内容は、安居香山氏がかつて日本で発見した異本の断巻とも一致するものであった。

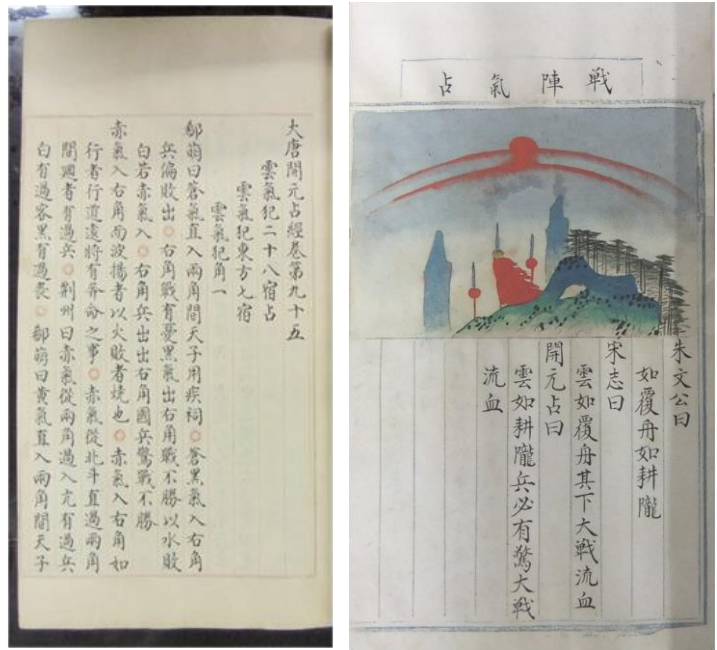
正体不明の異本がここに至って、明王朝の秘蔵本の流れを汲むことが明らかとなってきたのである。

そして、その後、さらに新たな資料から、従来、全く知られていなかった歴代王朝に秘蔵・継承される『開元占経』の存在が浮かび挙がってきた。例えば、近年発見された元代の法令集『至正条格』には、『開元占経』が当時、禁書となっていたとする記事がある。当時は天文学が国家に独占され、個人の独学は禁止されていたから、『開元占経』が禁書対象となっても不思議はないが、本資料の発見により、元朝にも『開元占経』が伝わっており、その流布を政府が警戒していたことが窺える。また、元末明初に成立する『天元玉曆祥異賦』(彩色抄本、右図)には、『開元占経』からの引用文が相当数見えているが、引用文を詳しく検討してみたところ、これが閣本からの引用であることも分かってきた。この点から見ても、閣本が素性の正しいテキストであることが窺える。なお、『天元玉曆祥異賦』もまた謎の多い資料ではあるが、本書の原形(無図本)は金王朝まで遡る可能性もあり、そこから金→元→明と『開元占経』写本が継承されてきた可能性も浮かび挙がって来たと言える。今後、『天元玉曆祥異賦』を中心とする関連資料の調査・研究が新たな課題となろう。

補論：『開元占経』の背後に広がる世界観—怪異と自然を包括した宇宙観—

最後に、『開元占経』の背景にある世界観について述べたい。『開元占経』に見える天変地異や怪異は、天人相感思想では、いずれも天の降す警告と捉えられた。それは当時の人々にとって、一種の自然現象(自然感応)であり、幽霊や妖怪の起こす怪異や禍・祟とは一線を画すものであった。例えば儒教の「怪力乱神を語らず」なども、実は幽霊・妖怪の起こす怪異を批判したもので、自然感応の怪異は否定されなかった。

しかし、こうした認識があくまでも建前的・表面的なものであることが、本研究の一環である鬼神観研究から徐々に分かって来た。従来から、民間信仰・通俗文学には幽霊・妖怪の起こす怪異が色濃く描かれるとされてきたが、これらもまた実は国家理念である自然感応の怪異と背後で結び付いていたのである。例えば、後漢の地方知識人・王充の鬼神観では、天変地異が死霊の起こす怪異と結び付けて解釈されるし、また、台湾国家図書館蔵『礼緯含文嘉』に、こうした傾向を色濃く持つ一篇が含まれるなど、本研究の過程で、二つの怪異の繋がりを裏付ける知見を得ることが出来た。今後、改めて、こうした視点から『開元占経』の背景にある世界観・宇宙観を読み解いてゆくことで、前近代東アジア固有の心性の在り方も見えて来よう。



左・復旦大蔵『開元占経』写本(成化閣本系)、右・内閣文庫蔵『天元玉曆祥異賦』(『開元占経』からの引用文が見える)。